

『文化会議』第120号(1979年6月)

矢島 鈞次

(東京工業大学教授)

えつらんしつ

中嶋嶺雄著

中ソ対立と現代



年に一度は「座右書」に出合う幸福に、今まで私はあずかってきた。読書する楽しみは、座右書との出会いを求めてのさすらいにあるのかも知れない。今から十年程以前、神奈川県教育センターを訪問した帰路、なに気なく立ち寄った本屋で手にした中嶋嶺雄著「現代中国論」も私の座右書の一つとして、いつでも机から手のとどく書棚にある。今度、その細に「中ソ対立と現代」が新しく加わった。決してオーバーな表現ではなく、中国学の極限を資料的にも、分析的にも示してくれたのが本書であると同時に、日本をとりまく近隣国現代史としても最高水準をいく本であろう。一章一章には、歴史の流れを大きく変える決定的瞬間のドラマがある。その感情の高まりを著者は極力抑えて、多岐にわたるデータを駆使してクールに九分通り説明して、残りの一分を読者の観察と説明努力にゆだねる手法をとっている。

序章で、モンゴル、東北、新疆が中ソ両国の「中間地帯」であるのに比して、朝鮮半島は中ソ両国の「緩衝地帯」である、インドシナ半島を含んだこの緩衝地帯が常に中国との深いかかわりをもちながら、中国という文明の中心地域では熱戦の舞台とはならず、不幸なことに中国を中心とする二つの周辺地域が熱戦の対象となった文明的展開は、まことに説得力に富む。

第一章にも、いくつかのドラマが秘められている。ヤルタ協定はソ連に極東情勢を全面的に掌握するフリーハンドを与えてしまったこと、ヤルタ協定実行、ポーランド問題などを通じてのアメリカの対ソ不信、それにもかかわらずアメリカはなぜ日本に原爆投下を敢えて行ったのか、そこにはソ連牽制の影が大きく浮彫り

にされていると判断できる。そして最後に日本占領にソ連を参加させないというトルーマンの決意へと固められていくドラマの大きなうねりは、アカデミックに見事である。

第二章の山場はつぎの箇所にある。ヤルタ密約に中国は手放しで称賛し、アメリカの抗日努力での共同性に感謝の意を七全大会で公表したにもかかわらず、アメリカの対華政策が常に不分明で、ついにアメリカは「原爆独占の喪失」「中国の喪失」「中国チトー化の喪失」という「三重の喪失」を結果するに至る悲劇的道行きであろう。とくに、「ステイルウェル・グループ」というアメリカの親延安派の存在は忘れ難い。

第三章の中心は、中ソの本来的不信の一幕であろう。アメリカのハリマン大使に向ってスターリンが「中国の共産主義者はマーガリン共産主義者」だときめつけるくだり、モスクワにおける毛沢東に対するスターリンの冷遇と毛のねばり腰交渉、現在話題になっている中ソ条約の実際の発効が朝鮮戦争開始後の五〇年九月であったことなど、教えられる点が多に多い。

第四章の朝鮮戦争はドラマとしても、資料としても一級の出来映えである。今度公表された國務省文書による「先攻論争」への説明、アチソン演説で「現実に攻撃されたとき、第一に頼りになることは攻撃を受けた国民がまずそれに抵抗すること」という常識論、トルーマン・マッカーサー戦略抗争の背後にあるアメリカの中国への一貫した配慮などの諸点についての、資料的に裏打ちされた分析はすばらしい。

その他、高崗同盟の背後の支持者スターリンが存在したこと、スターリン死後の中ソ対立、中ソ対立の神話を過大評価することの危険性など、中ソ米をめぐる現代国際環境分析の最高水準を示してくれた決定版が本書である。著者の努力に敬意を表するとともに、本書を本年の吉野作造賞候補図書に私個人としては推せんしたい。

(中央公論社・一七〇〇円)